

詩を書くとき言葉とどうむきあえばいいのか、そんなささやかな悩みをいつも抱いている。あるいはだれにむかって書いているのか、なんてこともすこしはかんがえて書いている。結局は、自分にむけて、自分が習得した言葉で、自分について書いているだけだとおもってしまう（たとえそこに他者が描かれていたとしても、それが、自分でない、といいきれるだろうか）。自分はどこからきたのか、どこへいくのか、わかるはずもなく、ただ、この世界に投げだされている存在でしかない自分とはなんなのか、そんなふうには、確固たる自分よりもよりなく、自己承認なんて絵空事からはとく離れてしまっている自分とはなんなのか。

そんななかで詩を書いていると、ときとして自分の言葉が言葉として成立しているのかなどと不意に怖くなったりするのである。しかしそれでも、はじめに言葉があり、言葉によって世界は成立する。名づけることで世界は分節され認知される。語ることで世界は秩序を編みあげていくのだし、語ることで世界の構造を垣間見ることが出来る。自分という在り方が言葉によって形づけられ、姿を見せはじめ、その場に立ち会える僥倖、そのことだけを求めて詩を書いているようにおもわれる。（それもすべて幻想だといってしまうえばそれだけのことになるのだが）

まずは言葉にむきあう。日常的な傀儡や伝達的な機能に右往左往している言葉ではなく、ぼくのなかで語りたがっている言葉、ぼくの生を揺り動かしているような言葉、こういう在り方

だ。

ぼくは恐怖に震える。

このままでは危険だ、おそらくはあと数分もすれば彼らはここに到達する、だから早く逃げなければとぼくは思う。だがぼくの身体はといえば、なぜか頑丈な革の紐帯で白いベッドに縛りつけられていて、身動きひとつできない。

そうこうするうちにも、ガラスの車輪の集団は否応なくこちらに近づいてくる。

ベッドの上のぼくは、あの金髪の男たちが巻きおこす圧倒的な光の渦で容赦なく蹂躪され、漂白され、さらにはひと欠片さえも消費されてしまうのだろう。

なのに今、ぼくの胸がこんなに昂ぶっているのはいったいどういうわけなのか、あの美しく苛烈な光の棍棒に怯えながらも？

加藤思何理詩集「花あるいは骨」（土曜美術社）から「ガラスの車輪に乗る金髪の男たち」全篇。

夕立の時刻ならば

川ぞいから湧き出てくる

気配

「青い玩具」と交じりあってコトコトとした香

であってほしい、といっているような言葉、あるいは、咄嗟のできごとのようにぼくのなかに無意識的に生まれてきた言葉、不意の単語、脈絡のない論理、倫理や理論や文法以前に立ち上がったしまった言葉、を書きつける。その先に姿をあらわしてくる、なものか。

それは自分が思い描いたものではなく、自分でも理解しがたい姿をしているかもしれないが、まさしく自分自身でしかないあらわれ方をした言葉の束、それをぼくは詩と呼んでいるのだが、それだけでは詩にはならないだろう。

その書かれたものには読者の立ち会いが必要だ。ぼくの書いたものを読みながら、読者のなかに眠っている非合理で不可解で不条理な自分を発見する読者、がひとりでもいたらようやく詩作品にいのちを与えられる。詩を書くということはそんなふうなところほそいものだ。

詩を書くときひとはつねに言葉とどうむきあえばいいのか、そのことから詩が書かれる行為がはじまるだろう、きっと。

病室の窓からぼんやりと外を眺めていると、はるか彼方の緑に煙る山腹から、眩しく耀くガラスの車輪が隊列を組んで転がってくることに気づく。

眼を凝らせば、それぞれの車輪の内部には長い金髪を翻す全裸の男たちが乗っていて、彼らはその進路にあるすべてのものを光の棍棒で叩き毀しながら疾走してくるよう

川ぞいでは視線はさまよい
いつだって

「青い玩具」へと手がのびる

まだら猫が寄りそって来て
たやすく手を伸ばそうか
カタチを整えられずに玩具
そいつを自嘲気味にながめてる

「青さに満たされた
帰り道にはすすきがあればいい
夕立の時刻ならばなおさらいい」

ぼくの
水脈から湧き出てきては
オタオタトカタチを整えられずにね

伝言を受けたのは
時間屋の待つ川ぞいで
まだら猫がいて
すすきがあつたつけ

松田太郎詩集「青い玩具」から「青の気配」全篇。

加藤さんと松田さんの詩集からそれぞれ一篇づつ転載させていただいたが、ふたりの詩集を読みながらおもったことは、ほ

くたちは言葉にむきあうとつい、シニフィエを解説したいという欲求にかられるが、詩作品というのは世間的にまかり通っている日常的な言語としての役割から離脱し、効果的で効率的といった意味の挟撃から自由になることで、言葉を読むという愉楽にめぐりあえる、というしごく当たり前なことがここには展開されているということだった。その、加藤さんと松田さんの言語体験が読者のところを揺さぶって、読者のなかにあらたな言葉の愉楽がはじまる。

たとえば加藤さんは「言葉のソリ」に乗せることで言葉が自由に滑走し反転するさまをリアルタイムで体感しながら言葉に自分の目的地をゆだねてしまおう、という愉楽。

いっぽう松田さんは言葉がまだみずからを整えられていないところばそさを知ることそのころばそさにみずからをゆだねることに自分の行く末をかけてみる、という愉楽。

それぞれの詩集はそういう「快さ」に身をゆだねて自分を知りたい、と願っているし、また、書かれた言葉は読者にも作者にも縛られることのない存在でありたいと願っている。

いっぽう言葉によって縛られたいと願っている作品もある。そこでもはじめに言葉があり、言葉によって世界は姿を見せはじめのだが、それは作者からの強引な意味性をともなうて読者にやってくる。だから読者は作者の世界をすべて受容することで愉楽を得ることができる。

おばあさん、あのときあなたは時間のむこうをみていた。身に寸鉄もおびずに。ぬか床のにおいのなかのあなた、拳銃いちようくらいよいのですよ。ぶっぱなしたって。パーン。わたしを撃ったって。文句は言わない。どうぞ。

おばあさん、貧しく、寂しそうなおばあさん、ぼくはあのとき、引つ越しのことをかんがえていたのです。どこからどこへ引つ越すのか……わからなくなつて。けふ、おもいつきました。それで、おばあさん、あなたに電話しようと思いました。かかりませんでした。

おばあさん、貧しく寂しく、ぬか漬け臭いあなた。いじめられているのですか？ やさしい口調（笑顔）のひとびとに、とってもやさしく朗らかにいじめられているのですか。

了解！ 仕返ししましょう。てつだいます。どこまでも陰湿に報復しましょう。こくみんひとりびとりの口にペゴのピズルをくわえさせて、君が代を強制的にハミングさせませう！ おばあさん、あなたに指揮をまかせます。

ぼくはぼくから引つ越そうとしているのです、おばあさん。

辺見庸は小説にかかわらずエッセイにかかわらず詩にかかわらず「怒り」の感情を「ほむら」のようにかかえている。今回のこの詩とも物語ともいえる（分野なんて関係ないのだが）一

辺見庸『純粋な幸福』（毎日新聞出版）から『おばあさん』全篇。バスの運転席近くに薄暗がりがあった。小さな影が消えいりそうに座っていた。イエウレイグモ。白髪のおばあさん。隣に座る。おばあさんは動かなかつた。よく見ると、顎をこきざみぬふるわせている。影の微動。

なにか臭つた。おしめか。ダイコンのぬか漬け。おばあさんの左手の指にさわつてみた。おばあさんは動かなかつた。ただ、冷たい指が細かにふるえていた。ぬか漬けが濃く臭つた。

いま、どうしていますか？

きのう隣にすわつた小さなおばあさん。いまどうなさっていますか？ お昼はちゃんとめしあがりましたか。お昼寝しましたか。夢をみましたか。どんな夢でしたか。バスでわたしが隣にすわつたこと、おぼえてらっしゃいますか。あなたはどなたですか。

どなたでもない、ということはありません。でも、だれでもない、そうとしか言えない姿をわたしはみました。運転席をしきる鉄のバーをあなたは両手でにぎっていた気がする。骨にじかに皮をはりつけたような手で。

冊を読みすすめていると、今回もまた、これでもかこれでもかという辺見庸の怒りが「直火」として言葉を焼きつくしている。ぼくはこのような「直火」を持つことはないからいつも、彼の「直火」に圧倒されつづけているのだが、『自動起床装置』からの付き合いだからどちらか一方がくたばるまで、ぼくからの一方通行ではあるが、付きあつていこうとおもっている。

まず、読みにくさがその怒りを代弁している（この『おばあさん』という散文は読みやすいが）。辺見庸の懐にある「唾棄すべきもの」攻撃すべきもの「自分自身でありたいもの」そんなものが一気に吐き出されているから、文法や構文や丁寧さなどどこ吹く風である。

そして卑猥な言葉を恐れない。「廃屋となつた厩舎の暗がり」で、さかつたメスブタと、ぜんしん汗みずくになり、ブタの糞とけたたましい叫び声にまみれて、さんざ苦労して性交してみせて、見物客からいくばくかの見物料をかせいでいる」（詩文『あの黒い森でミミズ焼く』より）のは、きつと、ぼくたち、ここに生きている多数のぼくたち、自分はその悪癖もなく蜜行などしたこともない、とおもっているぼくたち、それらが自分の行為であれ、他人の行為であれ、目をそらしているぼくたち全員胸の奥にしつかりと抱え込まれている「ほむら」であることを、辺見庸はあからさまにする。

その『あの黒い森でミミズ焼く』ではオバンツァンという独特な表現の「ありていにもうしあげれば、だれにも望まれていなかったのだ。わたし／わたしたち／あなた／あなたたちが、げんみつには、だれにも望まれていない。（略）なにが

望まれていなかったのか？ このさい、おもいきって言うてもよいかもしれない。ほぼなにもかも、である。在ることじたいをふくめ、かのじよにかんするほほいっさいがっさいが望まれてはいなかった」存在をとおして、権力、国家（天皇制も含めて）、経済や政策といった強欲さの外に弾きだされている者たち、災害復興という建て前が建て前でないということ、そんなだれもが知っているがとくに話題にすることのない日常性のなかに、即効性の毒を流し込んで、関係性を構築せよといっている。

さきに転載した『おばあさん』という散文詩のおばあさんも「貧しく、寂しそうなおばあさん／いじめられているのですか？ やさしい口調（笑顔）のひとびとに、とつてもやさしく朗らかにいじめられているのですか。」という行があるが、たしかに、弱者でしかないおばあさん、それは震災被害者であったり、精神、身体障害者であったり、貧困にあえぐ人たちであったり、だれにも相手されることのない老人であったりするのだが、かれらは権力を持った人たちや、権力を持ちたくても持てない人たちや、権力なんていらなくともっているがほんとうは権力を持ちたいと願っている人たち、あるいは、権力にも非権力にも関心がないと自認して自己充足しているだけの人たちに、きつと、「とつてもやさしく朗らかにいじめられている」のだ。

『あの黒い森でミミズ焼く』という物語は、「あの黒い森」の物語なのだが、辺見庸という記号を前提にすれば、「森」は都心のど真ん中に黒々と森をたたえているあそこしかおもしろい

ない。森の中の、天皇制という脈絡とつづく暗部を舞台に「オバンツァンがゆくのだ。足ひきずって、ビニール傘さして。みぞれの広場をゆくのだ。「こういうヘド、クズ、カス……」だらけの時代の広場を、たらたらと鼻水をたらして。いかがわしいヤーパンの猫背の小おとこが、おだやかな笑顔でつきしたがう」物語は「どんどんふくらむ黒い森に、オバンツァンがむかうよ。あの黒い森で、わたし、ミミズを焚くのよ、たくさん燃やすの、ミミズを。森ゆれるよ。森うねくるよ。森うごくよ。黒い森がまつ赤に燃えだす。なまぐさいよ。」と閉じられる。

森がうごくのはマクベスの物語。森がうごくとき王は滅んでしまう。そんなふうには黒い森がうごき、まつ赤に燃えだし、なまぐさくなる幻想を抱いて辺見庸はきょうも辺境を危うい足取りで歩いている。

この辺見庸からの言葉の率直性にほくたちはどう耐えていけばいいのだろう。